



Title	ヒュームにおける因果性の問題
Author(s)	大野, 篤一郎
Citation	カンティアーナ. 1992, 23, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66704
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヒュームにおける因果性の問題

大野篤一郎

一はじめに

因果性は、哲学においては、古くから問題になってきた。哲学史的に見ると、アリストテレスの自然学における四原因説は、ヨーロッパの哲学の歴史における原因についての最初のまとまった議論である。それは彼より前の哲学者達がこの世界を成り立たしめるアルケーと見なしたものは、すべて原因(*αιτία*)を問題にしたものであると解釈した結果成立した説である。ヨーロッパでは哲学も自然科学もある意味で存在や出来事の何らかの原因を説明することから始まつたと言えるだろう。

近世哲学においても、デカルト、ホップズ、ロックなどが原因について論じているが、ここでは、特にヒュームの因果作用(*causation*)についての考え方を検討してみたい。ヒュームの叙述が一貫していないために、彼の哲学をどう解釈するかは、極めて多様であると言える。因果性の問題にだけ限つても、ある解釈者は、ヒュームが因果性そのものを否定したというが、他の解釈者は、ヒュームは形而上学の原理としての因果律は否定したが、單称

的な因果作用は否定していないと主張している。また、別の解釈者は、ヒュームは因果性は認めたが、それが必然性を含意することを否定したという。更に、他の解釈者は、ヒュームが客観的必然性は否定したが、主観的な必然性は認めたと主張している。そこでわれわれは、一度振出しに戻つて実際にヒュームが因果性、或いは因果関係をどのように考えていたのかを考察することにしたい。

II 因果性の分析

ヒュームの認識論においては、先ず、認識の対象は二種類に分けられる。一つは観念の関係であり、他は事実問題 (matters of fact) である。観念の関係を対象とする科学は、幾何学、代数学、算数であり、それらの知識は、確実な知識である。なぜなら、これらの科学の命題を否定すると、論理的矛盾が生じるからである。言い換えるならば、これらの科学が扱う命題は、ア・プリオリな恒真命題である。このような観念の関係を扱うものをヒュームは、知識 (knowledge) と呼ぶ。これに対し、事実問題についての命題が否定されても、論理的に矛盾を生じない。「太陽は明日昇らないだらう」という命題は、矛盾を含まず、従つてそれが偽であることを証明することができない。そこでヒュームにとつては、われわれの感覚の現在の証言やわれわれの記憶の記録を越えた何らかの現実的の存在や事実問題をわれわれに保証する証拠 (evidence) の本性は何かが問題となる。従つてヒュームは、「事実問題に関する推理は、原因と結果の関係に基づいたふたふうに見える。」この関係にとつてのみ、われわれはわれわれの記憶と感覚の証拠を越えて進むことがやあら」(Eng. 26)⁽¹⁾ と言つるのである。

『人性論』の第一巻第三部第二節では、ヒュームは、「因果作用 (causation) の観念は、諸対象の間の関係から

由来するに違いない」(Tr. 75)⁽²⁾ と述べている。この箇所から、ヒュームは、因果作用を外的対象の間の関係と考えていたとするのは、いさか早計である。なぜなら、彼は他方では因果作用を印象相互の関係或いは観念相互の関係と見なしていたと思われるからである。たとえば、第一巻第一部第四節では、彼は観念の結びつき (connection)、或いは連合 (association) を論じているが、そこでは、類似性、近接性と並んで、因果関係も観念の間の関係であると述べているからである。そこで先ずわれわれはヒュームにおいては、「対象」と「観念」という言葉が何を意味していたかを考察しなければならない。

そのためには、われわれは、ヒュームの認識論の出発点にまで立ち戻る必要があるであろう。彼は、『人性論』の第一巻第一部第一節の冒頭で、「人間の心の持つすべての知覚は、二つの区別される種類に分けられる。それを私は印象と観念と呼ぼう」(Tr. 1) と述べていた。印象とは、感覚の知覚、即ちわれわれが見ている物体の色や形、匂いや手触りであり、或いはまた、反省の作用によって得られる痛みなどである。これに対して、「観念によって、私が意味するのは、思考や推理における印象についての微かなイメージである。」(ibid.)。そして良く知られているように、ヒュームは、両者の違いは程度の違いであり、印象の中にも観念に近いものがあり、観念の中にも印象に近いものがあることを認めている。

さて問題は、知覚と物的対象との間の区別が考えられていたかどうかということである。ヒュームは、『人性論』第一巻第四部第二節で、「なぜわれわれは対象が感覚に現前してない場合でも、対象に連続した存在を持たせるのか、なぜわれわれは、対象に心や知覚とは別の存在を持たせるのか」(Tr. 188) という問い合わせを出す。このでは、彼はわれわれにそのような存在を考えさせるのは、感覚でも理性でもなくして、想像力であると考えている。わ

れわれが連続的な存在を持つてゐる見なす対象は独特的の恒常性 (constancy) を持つてゐる。「現在私の目前にある山や家や木は、常に同じ順序で私に現れてきた。」(Tr. 194) しかし、ある印象が連関や恒常性を持つてゐるからと言つて、それらが外的に存在してゐると言えるだらうか。永続的な存在ではない内的な印象もある連関や規則性を持つてゐるが、それらの印象は、知覚されない場合でも、存在するとは言えない。これに対して、恒常性を持つてゐると思われる、太陽や海は、一時知覚されなくても、存在し続けると思われてゐる。この場合、最初の知覚が失われ、中断された後で、第二の知覚が新たに作り出されたと考へるといふは不条理であらう。そこでわれわれは最初の知覚が中断されている間にも、知覚されない対象が存在し続けたと考へる。しかし、この場合、われわれが知覚するものの背後にそれとは独立の対象が存在すると考へるのは想像力のせいである。そもそも知覚が中断される前と後とに、われわれが知覚しているものが同一であるとわれわれが見なすのも想像力による。この想像力によつて連続的存在という虚構が生まれたのである。」(Tr. 212) こう結論にヒュームは到達する。

更にヒュームは、「哲学者たちが、彼らが共存し、類似してゐると仮定する対象と感覚とを区別するのを、われわれは見た。けれども、これは人類一般によつては理解されない区別である。彼らは唯一つの物しか知覚しないから、二重の存在と表象についての意見には、決して同意できないのである」(Tr. 202) と述べている。ヒュームは、哲学者としては、デカルトやロックのように、感覚の知覚の背後にそれと区別された外的対象の存在を認めだが、常識人としては、そのような二重の存在を認めなかつたと言つべきである。⁽³⁾

彼の認識論上の立場は、常に首尾一貫してゐる訳ではないが、「われわれが確実に知り得るものは、知覚のみで

ヒュームにおける因果性の問題

ある」と考えた点で、彼の立場は現象論 (phenomenalism) であると解してよいと思われる。しかし、マンデルボーム (Maurice Mandelbaum) ⁽⁴⁾ が注意しているように、もし、現象論を「すべてのわれわれの知識やすべてのわれわれの信念やすべてのわれわれの推測は、現象とともに終わる。われわれは現象の背後に、現象を越えて行くことはできないし、そう試みるべきではない」という考え方であると定義するならば、この意味ではヒュームは現象論者ではなかつたと考えなければならない。既に明らかにしたように、彼が「知覚と対象とは同一である」と述べたとき、彼はバークリーのように知覚の背後に物的対象があることを否定したのではなかつた。そのことを裏付けたのは『人間悟性に関する研究』の中の次のような箇所である。「反省する人は誰も、われわれがこの家とかあの木とか言うとき、われわれが考へている存在が心の中の知覚に他ならず、齊一的で独立した他の存在のはかない写しであり表象であることを疑わなかつた。」(Eng. 152) 彼は、印象や観念以外に外的対象が存在するというデカルトやロックの立場を暗黙のうちに認めたが、それを証明することは、われわれが確実にその存在を知ることができるのは知覚だけであるとする彼の経験論的認識論の立場からは困難であつたと思われる。

さて、ヒュームによれば、因果関係は経験された印象と印象との間に成り立つだけではなく、経験された印象と経験されない觀念、或いは信念との間に成り立つと考えられる。問題はここにある。つまりどちらの因果関係が成り立つているにせよ、因果関係そのものもまた印象なのかなという問題である。後に明らかにされるように、ヒュームにとっては、因果作用は、経験によって、印象から得られるものであるが、それは感覚の印象というよりは、反省の印象によって得られるのである。

先ず、ヒュームによる原因と結果の関係の分析から始めよう。ヒュームによれば、第一に、原因、或いは結果と

考えられる対象は、空間的時間的に互いに近接している (contiguous) と考えられる。言い換えるならば、因果関係は、空間的時間的な近接性を含意している。「それが存在している場所、或いは時間からほんの少しでも隔たつているものは、時間において、或いは場所において作用することができない。」(Tr. 75) 確かに、原因と結果が空間的、或いは時間的に離れていることがあるかも知れない。しかし、ヒュームによれば、そのような場合でも、いくつかの原因の連鎖が隔たつた対象の間を繋いでいると考えられる。こういう訳で、「近接性という関係は、因果作用という関係にとつて本質的である。」(Tr. 75) 近接性が因果関係が成り立つための必要条件であるとして、ここにはいくつかの問題がある。第一に、明らかに因果関係が認められるが、必ずしも原因と結果とが空間的に近くはない場合がある。たとえば、月によって潮汐現象が起つるような場合である。この場合、原因となる月は、地球からは遙かに離れている。しかし、月の引力が地球の表面に直接に働いていると見えれば、この場合でも近接性が成り立つていると言えるかも知れない。また、近接性それ自身も直接観察できるとは限らない場合があることをヒューム自身が認めている。

原因と結果にとって、本質的な第二の関係は、「原因は、結果に先だつ」という関係である。この場合、しかし、一つの出来事のうち一方が他方に時間上先立つならば、一方が他方の原因だとは言えない。例えば、昼が夜に先立つからといって、昼が夜の原因だとは言えない。しかし、逆に、もし二つの出来事の間に因果関係が成り立つてゐるならば、原因が結果に時間上先立つということは認められるであろう。言い換えるならば、ある出来事が他の出来事に時間上先立つということは、それらの出来事の間に因果関係が成り立つたための必要条件であつても、十分条件ではないと思われる。

III 「必然的結びのもの」の分析

二つの対象の間に空間的時間的近接性と時間上の前後という二つの関係が成り立っているならば、それらの対象の間に因果関係が成り立つと言えるであろうか。二つの対象の間に因果関係が成り立つためには、更にそれらの対象の間に「必然的結びのもの」(necessary connection) が成り立たなければならないし、この関係は他の関係よりも遙かに重要であるとヒュームは述べ。そこで彼は、次に「この必然的結びのものの本性を見いだすために」(Tr. 77) 対象をあらゆる側から調べて、このような観念がそこから由来した印象、或いはいくつかの印象を見いだす。

「対象の知られている性質に目を向けるならば、私は直ちに原因と結果の関係が少なくともそれらの性質には依存していないことを見いだす。」(Tr. 77) 言い換えるならば、因果関係は、対象にとって外的であって、性質のようには内的ではない。そして、それらの対象の間には、近接性と絶起の関係しか見いだせないとヒュームは言う。近接性と絶起とは、知覚可能である。しかし、必然性は、知覚可能ではないようと思われる。そこで彼は、「原因と結果についてわれわれの観念の中に入り込む必然的結びつきの本性」(Tr. 78) を問う代わりに、別の問いを問わなければならぬ。その別の問いとは、第一に、「その存在が始まりを持つすべてのものは、原因【があるといふこと】は必然的であるとわれわれが断言するのはどんな理由によつてか」(ibid.) という問いであり、もう一つの問いは、「われわれはなぜ特定の原因が必然的に特定の結果を持たねばならぬと結論するのか」(ibid.) といふ問いである。第一の問いについては、次の第三部第三節で論じられ、第二の問いは、第三部第四節で論じられる。

ヒュームは、なぜ、「原因と結果との間にある必然的な結びつきの本性は何か」という問いに答える前に、この

ような一見回り道のように見える別の問い合わせられてゐる。ヒュームについて論じようとするのである。ヒュームについての優れたモノグラフを書いたバリー・ストラウド (Barry Stroud)によれば、因果性の観念が、特に「必然的な結びつき」の観念が、如何なる印象にも対応しないとしたら、言い換えれば因果性の観念が如何なる印象にも基づかないとしたら、そのことは、「一切の観念は、それ以前の印象に対応して、或いは基づいて、心の中に生じる」という彼の経験論の原則に矛盾することになる。ヒュームは、この危険を良く知っていた。実際、ヒュームは、第三部第三節で、次のように言つてゐる。「成功する望みがないので、私はどんな類似の印象も先行しない一つの観念を持つてゐるのだと主張すべきであるか。そうすれば、軽率と不整合を余りに強く証明することになるだろう。なぜなら、反対の原理が、少なくともわれわれが現在の困難をもつと十分に吟味するまでは、それ以上の疑いを許さないほど、既にしつかりと打ち立てられてゐるのだから。」(Tr. 77) そこで彼は、知覚の経験の中に、「必然的結びつき」の印象を直接探し求めるのを諦めて、「回り道する技術によつて、彼の経験論の原則を救おうとするのである」と、ストラウドは言つてゐる。⁽⁵⁾

さて、ヒュームは、「われわれは、なぜ、観察されたものから観察されないものを推理するのか」と問う。言い換えるならば、「われわれがある対象、或いはある出来事が提示されると、その原因が何かにあるに違いない、或いはその結果が何があるはずだと考へるのはどうしてか」と尋ねる。前者のような考え方の背後には、「存在し始めたものは、すべて、その存在の原因がある」とする因果律が前提されている。それでは、このような因果律は、直観によつてか、或いは証明によつて、確実であると言えるであるうか。ヒュームによれば、「われわれがこの格率を、上に説明した知識の観念によつて吟味するならば、われわれはそこにどんな直観的な確実性の印も見いださ

なふ。」(Tr. 79) いひで言われてゐる「上に説明した知識の観念」とは、「すぐりの確実性（確実な知識）は、観念を比較する」とから、つまり觀念が同一であり続ける限り、不变であるような関係を見いだすことから生じる」(ibid.) といふことであつて、それは、第三部第一節「知識について」において述べられていた。そこで挙げられていた、「觀念が同一」であり続ける限り、不变な関係」とは、例えば同等性 (equality) の関係であつて、三角形の觀念から、われわれは、その三つの角の和が二直角に等しいという同等性の觀念を見いだす。この関係は、三角形の觀念に関しては常に成り立つ。従つて、それは三角形の觀念からア・プリオリに演繹される知識である。といふが近接性や距離の関係においては、対象それ自体やその觀念における変化はなくとも、対象のある場所が変わることによつて関係が変わるから、ある結果がどのような原因からでてくるかについて、また、ある原因からどのような結果がでてくるかについては、確実な知識はありえない。それは蓋然的な知識であるにすぎない。言い換えるならば、それは経験的な知識であつて、ア・プリオリな知識ではありえない。

さて、「すべての対象には、原因がなければならぬ」ということを証明するためには、「産出の原理を持たないで、あるものが存在し始めるることは不可能である」(Tr. 79) といふことを示さなければならぬ。この後の命題が証明できなければ、前の命題は、証明できないといひ、ヒュームは言ふ。ヒュームによれば、「あるものが原因なしに存在する」といふことは可能である。なぜならば、すべての判明な觀念は、互いに区別され得る。Aが存在し始めるという觀念は、Aの存在の原因の觀念とは明白に区別される。それゆえ、われわれは、心の中や、一つの觀念を他の觀念から切り離すことができる。われわれは、ある対象の觀念が存在し始めるところを、その觀念の成立の原因の觀念と結びつけるとなしに、考える (conceive) ことがである。われわれが考えるところができるのは、矛盾

を含まないと「言う意味で可能である。

更に、ヒュームは、原因の必然性のためにこれまでされた論証は、やがて虚偽的で詭弁的であると主張する。たとえば、ホップズは、「われわれがある対象が存在し始めると仮定する時点と場所とは、それ 자체において等しい。ある時点と場所に固有であり、それによって存在を規定し、固定するある原因が存在しないならば、ある対象は永遠に宙ぶらりんで決して存在し始めない」(Tr. 80) ⁽⁶⁾ とする。このような論証に対し、ヒュームは、時間や場所がそういう仕方で規定されていると仮定するよりむしろ、時間や場所が原因がなくとも決定されると仮定するのに困難はないと言う。この主題について生じる第一の問いは、その対象が存在しなければならないかどうかであり、第二の問いは、いつどうしてその対象が存在し始めなければならないかである。もし、原因のないことが第一の問いにとつて不条理であるなら、それは第二の問いにとつても不条理である。しかし、もし、その不条理が一方の場合に、証明がなければ明かでないとすれば、他方の場合にも、証明が必要である。

またサ缪エル・クラーク (Samuel Clarke, 1675—1729) は、次のような因果律の証明を行つた。「すべてのものは原因を必要とする。もし外的な原因が存在しなじむすると、それは自分自身を生ぜしめるであらう。しかし、そうだとすると、その対象は存在した以前に存在するといつてなるだらう。これは不可能である。」これに対してヒュームは、「何らかの事物が原因なしに存在するようになるといふことは、それ自身が自己自身の原因であるといふ」とを肯定するものではない (Tr. 81) と主張する。いづれはヒュームは、原因なしにあるものが生じるといふことは可能だと考えてゐる。従つて、いづれは彼は「すべての事物は原因を持つ」という因果律を否定していると考えられる。

因果律の第三の証明は「原因なしに生み出されたものは、之によつて生み出された」と主張する。しかし、ヒュームによれば、ある対象が原因を持たないと仮定することは、それが生み出されないと仮定することであつて、それが無によつて生ぜしめられると仮定することではない。

このようにもし、すべてのものが原因を持つとすれば、外的原因がない場合には、対象はそれ自身の原因であるか、或いは無が原因であるかでなければならないと考えることは、不条理である。

第四の論証は、「すべての結果は、原因を持つ。なぜならば、結果の観念は原因の観念を含意しているからである」と主張する。結果は確かに、原因がその相関項である関係語である。しかし、結果は原因を持たねばならないとしても、そこから「すべての存在には、原因が先立つ」ということは証明されない。ヒュームの挙げている例によれば、それは、「すべての夫は妻をもつ」ということが真であつても、そこから「すべての人々が結婚しているに違ひない」ということは帰結しないのと同じである。⁽⁸⁾

こうして「すべての存在し始める対象は、存在の原因をもつ」という命題は、直観によつても論証によつても、証明されないといふことが明らかになる。

そこでヒュームは、第三部第四節では、「われわれがなぜこのような特定の原因から必然的に」ののような特定の結果をもつと結論するのか」と問う。ここではヒュームは、「特定の原因は特定の結果を持つ」という単称的因果命題の妥当性の根拠を問題にしていると考えられよう。

ヒュームが例として挙げているのは、「シーザーは、三月十五日に元老院で殺された」という歴史的事実をわれわれがいかにして知るかという場合である。これはわれわれが直接に目撃した出来事ではない。われわれはそれを

事実について述べた歴史的記録から知るのである。われわれが直接経験するのは、そのような記録の文字である。

それは、ある観念の記号として用いられている。そしてその観念は、更に直接現場に居合わせた人の心の中にある。こうして、「シーザーが元老院で殺された」という知識は、結局、このように感覚或いは記憶に基づいている。それでヒュームは、「原因と結果に関する推理は、もともとある印象から由来する」と主張する。ここでは、原因と

結果の関係は、事実的関係というよりは、推論的な関係だと考えられるに至っているように思われる。

それではどうしてこのような推論が可能なのであらうか。このような推論が可能であるためには、第一に、元の印象、第二にそれと結び付けられた原因と結果の観念への移行と、第三にその観念の本性と諸性質がなければならぬ。

ヒュームによれば、経験からの推理は、現在の印象が、過去の記憶か、或いは観察された確信 (conviction) に基づかなければならぬ。対象 A が常に観念 B を伴うということを思い出すことによって、われわれは、A、例えば焰が与えられるならば、B、例えば熱さの存在を推理する。

「このように前進する」と云つて、われわれは知らず知らず、原因と結果の間の新しい関係を発見した。この関係が、『恒常的繋がり』 (constant conjunction) である。近接性と繼起だけでは、二つの対象を原因と結果と呼ばせるには十分ではない。これらの関係がいくつかの場合に維持されているということを知覚するのでなければ。」 (Tr. 87) 言い換えるならば、唯一つの A から、B を引き出す代わりに、いくつかの A に類似した場合の恒常的なつながりに基づいて、因果推理は行われることをヒュームは示したのである。言い換えるならば、推理が二つの対象、或いは出来事の間に因果関係を生み出すのである。それではこのような推理をわれわれがする根拠は何に

あるのかが次に問題となる。

四 帰納法と自然の齊一性に対する懷疑

「次の問題は、経験は、この觀念を悟性によつて生み出すのか、それとも想像力によつて生み出すのかといふことである。言い換えれば、われわれは、この印象から觀念への移行をするよう、理性によつて規定されているのか、それとも、知覚のある連合と關係によつて規定されているのかといふことである。」(Tr. 88)

われわれが経験しなかつた場合は、われわれが経験した場合と類似しているに違ひない。従つて、自然のなり行きは常に齊一的に同じであるという原理に従つて理性は過去の出来事から未來の出来事を推理する。これを自然の齊一性の原理 (principle of the uniformity of nature) と呼ぶことにしよう。因果的推理は、このような自然の齊一性の原理を前提していいる。そして、ヒュームはこの原理を疑うのである。彼は言つ「われわれが経験しなかつた場合が、経験した場合と類似するといふことを證明する論証はありえない。」(Tr. 89)

この自然の齊一性の原理に対する懷疑は、『人間悟性に関する研究』の中ではもつとほつきりと述べられてゐる。「自然の成り行きが変わるかもしれないということ、われわれが経験した対象と見かけの上では似てゐる対象が異なつた、或いは反対の結果を伴うかもしれないということ』とは、[論理的] 矛盾を含まない。」(Enq. 35)

この箇所で、ヒュームは帰納法を批判していると一般には解されている。彼は自然の齊一性を疑うことによつて、帰納法による知識の確実性を疑つた。彼は、もし、自然が齊一的でないとしたら、言い換えるならば、未來が過去に似ていないとしたら、或いは、類似した感覺的性質が類似した結果を伴わないとしたら、帰納的推理の普通の形

式は、正確な予測を与えると期待することはできないと主張したのである。更に、ヒュームは、自然が齊一的でないと仮定しても、別に論理的矛盾は生じないと考える。なぜなら自然の齊一性は、「事実問題」であって、「観念の関係」ではないからである。すでに述べたように、これまで観察した規則性は、未来においては成り立たないかもしれない。「それゆえ、経験に基づくどんな論証も、過去と未来の類似性を証明することは不可能である。なぜなら、これらの論証は、すべてこの類似性の仮定に基づいているからである。」(Enq. 38) 自然の齊一性の原理を経験的に根拠づけようとすれば、われわれは観察されたものに基づいて、この原理の真理性を推理せねばならないであろう。しかし、既に述べたように、観察されたものから観察されないものを推理する場合、われわれは既に齊一性が真であることを前提している。従って、それは循環論証の誤りを犯していることになる。こうして経験に基づいて、自然の齊一性の原理の真理性を根拠づけることはできないことが明らかになる。それと同時にこの原理に基づいて行われる因果的推理もまた妥当性の根拠を失う。そもそも自然の齊一性の原理は理性によって得られるア・プリオリな原理だと考えたことに誤りがあった。そこでヒュームはそれが理性によって得られた原理ではなくて、想像力の産物であることを明らかにする。

五 想像力と信念

ヒュームによれば、自然の齊一性の原理は、理性に基づくものではない。「心がある観念から、或いは一つの対象の印象から他の対象の観念、或いは信念 (belief) へと移行する場合、心は、理性によつて規定されているのではなくて、これらの対象の観念を連合し、想像力の中で結び付ける原理によつて規定されている。もし、対象が悟

性に対して結びつきを持たないよう、観念が想像の中では結合を持たないとしたら、われわれは原因から結果へのどんな推理も引き出すことはできないであろう。」(Tr. 92) ところで、観念連合の原理は、ヒュームによれば、三つある。ある対象の印象は、それと似ているか、近似しているか、或いはそれと結びついている他の対象の印象を導入する。言い換えるならば、Aという種類の出来事とBという種類の出来事との間に恒常的なつながりが経験されると、Aという観念とBという観念との間の結びつきが、理性によつてではなくて、想像力によつて作り出されるとヒュームは考へてゐる。ある対象の存在が他の対象の存在を伴う (imply) ということを、理性はわれわれに説得しない。従つて、われわれが一つの印象から他の対象の信念へと移行するとき、われわれは理性によつて規定されているのではなくて、習慣によつて、或いは想像力の規則である観念連合の規則によつて規定されているのである。

それでは信念 (belief) とは何であらうか。ヒュームは、信念を目の前の印象との関係によつて生み出された生き生きした観念であると定義している。この信念の定義をヒュームは、次のような例を挙げて説明しようとしている。

「ある人が座つてある本を小説として読んでおり、他の人は本当の歴史として読んでいるとすれば、彼らは單に同じ観念を同じ順序で受け取る。一方は、本に書かれていることは真ではないと考え、他方は真であると信じているとしても、二人が著者は同じ思想を持つと考へることを妨げない。著者の言葉は、二人の読者に同じ観念を生ぜしめるが、著者の証言は、彼らに対しても同じ影響を持たない。後者は、すべての出来事についてより生き生きしたイメージを持つ。これに対して、著者の証言を信用しない前者は、これらすべての特殊についてもよりばんやりし

た生氣のない考え方持たない。」(Tr. 97f.)

ヒュームは、単なる観念と信念とを明確に区別できなかつたように見える。その結果、彼は、「信念はある観念についてのより生き生きした強い捉え方である」(Tr. 103) としか主張できないのである。『人性論』の最後に付けられた付録の中でヒュームは、次のように言つてゐる。

「何らかの事実問題についての信念を形成する心の」の働きは、これまで哲学の最大のミステリーの一つであったようと思われる。尤もそれを説明するのに何らかの困難があるとは思わなかつたけれども。私はといえば、「」の場合にかなりの困難を見いだし、私がこの主題を完全に理解していると思う時でさえ、私の意見を表現する言葉に窮するということを認めなければならない。私は私にとって非常に自明であると思われる帰納によつて、意見或いは信念は、その性質や部分の秩序によつてでなくて、それが捉えられる仕方において虚構とは異なる観念に他ならないと結論する。しかし、この捉え方を説明しようとする時、この例に十分に答える言葉が殆ど見つからず、心の働きの完全な概念を与えるためには、誰かの感じに訴えざるを得ない。われわれが同意する観念はわれわれによつて、想像力によつてわれわれに与えられた虚構の観念とは違つて、感じられる。」(Tr. 628f.) ここでヒュームが言おうとしているのは、われわれが同意している観念、即ち、信念は、想像力によつて生み出された観念とは、力や生動性や堅固さ確固さや安定性の点で区別されると、いふことだと思われる。

六 因果的必然性の主観的根拠

『人性論』第一巻第三部第十四節は、「必然的結びつきの観念について」と題されている。いわゆるヒュームの

問題は、因果性の観念に含まれている必然的結びつきという観念がどのような印象から生じるかとどうしたことである。ヒュームではもう一度、因果関係は、空間的時間的近接性と時間上の前後の観念に分析される。しかし、因果関係はそれに尽きるものではない。われわれがAという種類の出来事は、Bという種類の出来事を伴うと結論するためには、「対象の一つが現れると、習慣によって心がその随伴者を考えるように決定される」と必要である。この習慣によって形成された心の傾向 (propensity) という印象こそ因果関係の必然的結びつきの源である。ヒュームは、因果的必然性の観念の成立根拠が習慣的繰り返しの中にあることを指摘するだけでなく、原因となる対象の持つ力や効力 (efficacy) 因果性こそ因果的必然性の根拠であるとする考え方についても批判を加えている。第三部の初めのほうの節では、因果関係の根拠が力であるとする考え方についても、触れられていたけれども十分に考慮されていなかつた。ヒュームは、先ず、効力や作用 (agency)、力、エネルギー、必然性、結びつきや産出的性質といった語は、すべて同義語であると言つた。従つて、結びつきを定義するのに力や効力を用いるのは馬鹿氣である。問題はやはり、「必然的結びつき」という観念がどのような印象に基づいて生じたかを探求するのである。もし、それが複合観念であるならば、それは複合的印象から生じたのであるし、もし、それが単純観念であるならば、それは単純作用から生じたのである。

ロックは、因果作用の観念は、力の印象に基づくと主張した。例えば、われわれは、物体の運動や変化のように、物質の中にいくつかの新しい产出があるということを見いだし、どこかにそれらを生ぜしめるとのできる力があるに違いないと結論する」とつて、われわれはこれらの推理によつて、力と効力の観念に到達すると説明する。しかし、ヒュームによれば、この説明は哲学的と言うよりは通俗的である。その理由として、第一に理性だけでは、

どんな初步的な観念も生れしめるいはやしない。第一に、経験からの区別されたものとしての理性によれば、われわれは原因或いは生ぜしめる性質が存在のすべての初めに必要であるとは結論しないからである。

デカルトは、物体が何らかの力を持つということを否定していた。ニュートン自身は重力の存在を認めていたが、それを説明するのに何らかの困難していたように見える。科学史家アレクサンダー・コワレ (Alexandre Koyré, 1882—1964) によると、ニュートン自身が実在的な物理力としての引力の存在を信じていなかつた。デカルトやハイニクスも同様、ニュートンの物質の遠隔作用 (action in distance) を認めるのがやめなかつた。ニュートンは、物体の求心的運動を生み出す現実の力を説明するのではなく、引力或いは重力の法則を研究した。彼にとっては、「いれらの力が、——物理的であれ形而上学的であれ——厳密に数学的法則に従つて作用すると仮定し、これらの力を実在の力として扱はなければ十分ではあつた」⁽⁹⁾ ニュートンは、友人のリチャード・ベントレー (Richard Bentley, 1662—1742) 宛の手紙の中で、「あなたは時々重力が物質に本質的で内在的であると語つておられますが。私がおもふる所は、その考え方を私のやうにしなふやうれし。なぜなら、重力の原因は、私が知つていぬよんだ振りはしないものであり、従つて、それを考へるのにもうと時間がかかるものであるからです」⁽¹⁰⁾ と語つてゐる。このよつた、ニュートン自身の意見を見ると、ヒュームが遠隔作用を認めなかつたからといふ、彼がいの当時の自然科学について無知であったと述べてゐるマリオ・ブンゲ (Mario Bunge) のヒューム批判は、科学史的に見て、必然の公平なものであるとは言えないと思われる。⁽¹¹⁾

ロバート自身も初めは「衝突力が物体が作用する唯一の仕方である」と考えていたが、ステイリングフリート (Edward Stillingfleet, 1635—1699) 宛の書簡の中では、「賢明なニュートン氏の比類のない書物によつて、私が

説得されたのは、私の限られた理解によつて、この点で神の力を制限することは、余りに大胆な先入見であるといふことである」と述べている。当時の知識人にとっては、衝撃によつて力が一つの物体から他の物体へと伝えられることは理解できたが、引力と言うのは神秘的な力であり、従つて受け入れることは困難であった。⁽¹³⁾

ヒューム自身も、「自然の究極的な力や効力は、われわれには全く知られない。従つて物質の知られた諸性質の中にそれを探しても無駄である」(Tr. 159)と述べている。その点では、ヒュームは、デカルトと同意見であったようと思われる。デカルト派の哲学者は、力を持っているのは、神のみであると考えた。彼らによれば、宇宙の第一動者である神は、初めに物質を創造しただけでなく物質に最初の衝撃力を与え、そしてその全能によつて事物を支えていると考えた。このような観念は印象からは得られないから、生得観念としてわれわれにア・プリオリに与えられているとデカルト及びデカルト主義者は考えた。

しかし、ヒューム自身はすべての観念は印象に由来すると考えていたから、このような能動的な原理を神の中に見いだすことはできないと言う。物質の中にも見いだせない力の観念は、神の中にも見いだせないのである。またヒュームは、経験論の立場から、抽象一般観念の存在を否定していた。存在するのは特殊の観念のみである。そうであるとすると、力もまた特殊な対象の中に見いだされなければならない。

さて、その一方が原因であり、他方が結果であるような二つの対象がわれわれに呈示されないと仮定しよう。これらの対象の一つを考えても、両方を考えても、それらを結びつけているきずなをわれわれは決して知覚しない。しかし、同じ対象が常に一緒に繋げられている場合をいくつか観察すると仮定しよう。そうするとわれわれは直ちにそれらの対象の間の結びつきを想像し、一方から他方へと推理し始める。類似の場合の多数あることが、力、或

いは結びつきの本質を構成しているのである。

こうして原因と結果との間の必然的結びつきの観念は、感覚の知覚から生じないとすれば、それは内的印象、或いは反省の印象から由来すると考えると得ない。その印象は、習慣によって生み出された、一つの対象からそれによつて他の印象へと移行する傾向 (propensity) 以外の印象ではありえない。要するに、「必然性は、対象の中に続くのではなくて、心の中にあるのだ」(Tr. 165) ヒュームは結論する。

因果的必然性は、心の中にあるというヒュームの主張は、一種の観念論であるように思われる。それによつて彼は原因の効力 (efficacy) が心の規定性にあり、原因は心と独立に働くのではないと主張しているように見える。これに対して、むしろ原因となる対象は、外的世紀そのものの中には、心が存在しなくても働き続けるのではないか、思惟が働くためには、原因に依存するかもしれないが、原因は思惟に依存していないのではないかというような批判が容易に考えられる。このような批判に対し、ヒュームは次のように反論している。

このような批判は、盲人が緋色はトランペットの音と同じではないとか、光は固体性と同じではないと言う仮定の中に大きな不条理を見いだす振りをしているのと同じである。つまり盲人は緋色や光を見たことがないから、それが音や固体性と異なるということが理解できないのに、それが異なることを理解しているような振りをしているのである。われわれはこの盲人と同様、何らかの対象の中に力や効力についての観念を実際には持つておらず、また、原因と結果との間の実際の結びつきについては何の観念も持たないとすれば、効力がすべての作用の中で必然的であると証明することは余り意味がない。効力がすべての作用の中で必然的であると語る際に、われわれはわれわれ自身の語っている意味を理解しておらず、互いに全く異なつてゐる観念を混同しているのだとヒューム

は言う。物質的対象や非物質的対象の両方に、われわれが全く知らない性質があるかもしないということは認めてもよい。そしてこれらの性質を力とか効力とか呼んだとしてもそれは世界にとつてはどうでもよいことである。しかし、これらの言葉で未知の性質を言い表す代わりに、われわれが力や効力という言葉で、われわれが明晰な観念を持っているが、われわれがこれらの表現を適用する対象とは全く両立しない何かを意味するならば、曖昧さや誤謬が生じ始め、われわれは偽りの哲学によつて惑わされる。われわれが実際は思惟の規定性であるものを外的対象に転移し、外的対象の間に悟性で捉え得る現実の結びつきがあると仮定するならば、それは誤りである。

また、自然の働きがわれわれの思惟や推理とは独立であるということもヒュームは、認める。そして対象の間に近接性や繼起の関係が成立していると、類似した対象は、いくつかの場合に、類似した関係を持つと観察されるかもしれない。そしてこれらの対象はすべて悟性の働きとは独立で、それに先立つということも認められる。しかし、一歩進んで、これらの対象に力や必然的結びつきを持たせるならば、それはわれわれが対象の中に観察するのではなくて、われわれが内的に感じているものから、そのような観念を引き出すのである。

こうして「因果的必然性」は、対象の間の関係ではなくて、習慣によつて心がそのように規定されている感じに過ぎないことになる。しかし、次の問題は、この「心の規定性」(determination of mind) となる表現である。そこにはむしろ原因としての印象と結果としての観念或いは信念との間に因果的必然性があることが反つて認められているのではないか。しかし、ヒュームは、「われわれの内的な知覚の間の結合原理は、外的対象の間のそれと同様に、悟性によつては捉えられず、経験即ち知覚によつてしかわれわれには知られない」(Tr. 169) と言つている。「心の規定性」は感じとしてしか捉えられないというのである。こうしてヒュームの因果的必然性に

ついての考え方は、全く主観的であることが明かになる。⁽¹⁴⁾

七 結 び

最後に、ヒュームの因果性の概念についての考え方が後の哲学者にどのような影響を与えたかを簡単に一瞥することにしよう。

ヒュームは印象と観念との間に因果関係を認めていた。そして因果関係に依存した因果的推理が現実に行われていることを認めた。しかし、彼はそのような因果的推理は、帰納的推理であり、従つて、それは過去の出来事と未來の出来事の間に齊一性が成り立つということを前提していると考えた。しかし、このような自然の齊一性は、直観によつても証明によつても真であると見なすことはできない。そこで彼は、帰納的推理の妥当性を否定した。彼の因果性の分析から導かれる結論は、対象の間に見いだされる関係は、印象に基づく空間的近接性と時間上の継起と習慣と想像力に基づく恒常的なつながらに他ならず、それは主観的な必然性しか持たないということである。

このように、因果性は必然性を含意しなければならないという主張に対しては、ヒュームは、心理学的な説明しか与えることはできなかつた。因果的必然性なるものは、ヒュームによれば、ある対象の印象から、習慣と想像力による観念連合の原理によつて、別の観念、域いは信念へと移行するようわれわれの心が規定されていることにについての感じ (feeling) に過ぎず、それを客観的対象の間の関係に投影することは、明らかに間違いであった。因果的必然性は、理性の産物ではなくて、想像力の産物であり、従つて、あるものが存在するならば、他のものが結果として必然的に存在しなければならないという因果的必然性の原理は、単に習慣に基づく恒常的なつながらに

他ならぬとするヒュームの立場が、「独断論的まどろみを中断し、思弁的哲学の分野における私の研究に全く別
の方向を与えた」⁽¹⁵⁾と、「プロローグメナ」(Prolegomena zur jeden künftigen Metaphysik)においてカントに
言わせるにこなつたことはよく知られている。カントにとって、原因と結果の結びつきが必然的であるためには、
因果性はヒュームの考えたように、感覚的、或いは反省的印象に基づくものではなくて、悟性によって生み出され
たア・プリオリな概念、言い換えれば、カテゴリーでなければならなかつた。言い換えるならば、事実問題として
の因果関係は、ヒュームが主張したように、すべて経験的であるのではなく、そこにはア・プリオリなものが含ま
れなければならないとカントは考えた。そのためには、因果関係は悟性のア・プリオリな概念でなければならない。
こうして、「すべての出来事には原因がある」という因果律は、先天的総合判断の一つの場合となる。しかし、カ
ントでは、このようにして成り立つ先天的総合判断がどうして同時に客観的妥当性を持つことができるのかを説
明することが必要になる。これは結局、因果性を含むすべてのカテゴリーの超越論的演繹の問題を解決すること
に他ならない。そうすると、カントは「因果性はどうして必然性を持つことができるか」として「ヒュ
ームの問題」を解決できだと考えた。そしてカントは、そこから逆に、「自然の齊一性」を「自然の合法則性」
(Gesetzmäßigkeit der Natur) として、「原則論の分析」の中で、いわゆる「経験の第二類推」の形で理由づけ
る」とができたのである。しかし、因果性についてのカントの考え方は、「すべての出来事には原因がある」とい
う因果律については当てはまるかもしれないが、ヒュームが問題としたような特定の原因と特定の結果との間の因
果関係がなぜ必然的であるかを説明することができないようと思われる。なぜならば、それを説明するためには必
要なのは因果律 (causal principle) ではなくて、おのれの因果法則 (causal laws) であるように思われるからである。

しかし、ヒュームと同様、カントも因果法則についてはほとんど何も語っていない。これに対して、現代の科学哲学の因果性の議論においては、法則の因果性とは何を意味するかが問題になっている。⁽¹⁶⁾ ヒュームは、因果性の問題を、個々の因果過程の中に見いだされる必然性、或いは力という形で捉えているけれども、自然法則が因果的であるかどうかについては、全く論じていない。このことは、因果性についての彼の議論の中で「説明」の概念が主題的に取り上げられなかつたことと関係があるようと思われる。因果性の概念がどういうことを意味しているかを分析した点に、ヒュームの大きな功績があることをわれわれは認めなければならない。しかし、以上述べたように、因果法則と因果的説明については、彼が何も述べなかつた点に、われわれは因果性についての彼の議論の限界を見なければならないだろう。

二十世紀に論理実証主義の哲学が成立すると、ヒュームの因果性の分析は、別の観点から論じられることになった。特に、ヒュームが自然の齊一性を否定することによって帰納法的推理の根拠づけを否定したことが新たに取り上げられ、帰納法が果たしてヒュームの言ふとおり、根拠づけられないのか、或いは、また、自然の齊一性を仮定しないで帰納法を根拠づける仕方はあるのかどうかが科学哲学の一つのテーマとなつた。「因果的必然性を如何にして根拠づけるか」という問題をカントが「ヒュームの問題」と呼んだのに対し、「帰納法をどのように根拠づけるか」という問題は、ポッパー（Karl Popper, 1902—）によって、別の意味で「ヒュームの問題」と名づけられた。ポッパー自身は、帰納法によっては、われわれは真なる認識に到達しえないと考え、演繹論理のみが真なる認識に到達できると考えている点では、ヒューム主義者だと言つてよい。

注

- (8) S. 359 には見えたやれど。

ロ ラクヤクターか他の理神論者たるは、原因を持たない神、即ち第一動者の存在を信じていたから、「かぐやのもののが原因かむ」 といふことは否定せざるを得なかつたのである。そこで彼らは、もとと隠やかに、始まつたむのはやぐべ、原因を持たなかつて、かぐやの変化は原因を持たねばならぬ」と主張した。それは彼らによつては、経験論的な立場からも詮證かべりんが困難だつたからだ。

(9) Koyré, Alexandre. *From the Closed World to the Infinite Universe*. Baltimore, 1975. p. 176f.

(10) Ibid., p. 178.

(11) Bunge, Mario. *Causality and Modern Science*. 3rd rev. ed. New York, 1979. p. 59 セルヴィアム。

(12) Locke, John. *An Essay concerning Human Understanding*. ed. by Nidditch. Oxford, 1975. Book II, Section viii, 11.

(13) *The Works of John Locke*. 10 Vols. (1823) Rep. by Scientia Aalen, 1963, Vol. IV, p. 467.

(14) 「ものだ必然性は、この心理的な詮證の仕方だ」、「もとと表象は、この形體の詮證能力が戻れて、このへん、單に形式的的能性を意識かべりんが快心のものだらう」 (*Kants gesammelte Schriften*. Berlin, 1913. Bd. V. S. 36f.) ふつて、『哥白尼批判』 は、たゞかゝるの感覚からして、

(15) *Kants gesammelte Schriften*. Berlin, 1913. Bd. IV, S. 258—261.

(16) Stegmüller, Wolfgang. *Probleme und Resultate der Wissenschaftstheorie und Analytischen Philosophie*. Bd. 1: Wissenschaftliche Erklärung und Begründung. Berlin / Heidelberg / New York, 1969. S. 452—466. セルヴィアム。

(神戸女学院大学文学部教授)